茨木市における八朔と二百十日・二百二十日の行事とヒアゲについて

- 奈良春日神社、佐奈部神社、下穂積春日神社の事例から -

吉野 なつこ

１、はじめに

茨木市の民俗に関しては、『新修茨木市史』民俗編が網羅的に紹介しており、先行研究として大きな役割を果たしている。しかしながら、内容の記述が少ない祭りや記載されていない行事も多く、それらの行事を調査、検討することは市域の民俗を明らかにする上で重要であろう。そこで本稿ではこれまで注目されてこなかった、茨木市南西部において８月後半から９月前半にかけて行われる３つの行事に注目し、その調査報告と行事内容の検討を行いたい。

２、事例１　奈良春日神社　オヒャクトウのヒアゲ

春日神社は茨木市中央部南に位置する奈良に鎮座する､奈良地区の氏神である。昭和 38 年（1963 年）までは現在より北に 20 メートル離れた場所に所在していたが､府道中央環状線の敷設に伴い、境内と林地、池の半分を道路敷地として提供し、現在の位置へと場所を移動した。境内地は共有林であったが､現在は財産区として管理されている。

年間の行事は、10 月 15 日の大祭、12 月 15 日の新嘗祭、３月 15 日の祈年祭で、その他毎月１日に月次祭があり、茨木神社の宮司が神事を行っている。境内には水神さんとお稲荷さんが祀られており、それぞれ５月５日、２月初午に祭りがある。10 月 15 日の大祭には、湯立て神楽が奉納されるが、これは戦後一時中断したものを平成 20 年に復活したものである。湯立に使用する竈は戦前から使用されていたものを用いている。かつての大祭は大変賑やかで、村外に嫁いだ人も藪入りのように子供を連れて帰ってきたという。12 月 15 日の新嘗祭には祭りの当番が稲を奉納する。奈良地区は９つの組に分かれており、組単位で順番に神社の当番に当たる。当番は毎月１日の境内の清掃、月次祭への参拝、祭りの準備を行う。平成 29 年（2017 年）は７組が当番であった。

春日神社では、オヒャクトウのヒアゲと呼ばれる行事が毎年８月 31 日の晩に行われる。当日の流れを簡略に示すと、17 時頃に当番の組が神社に集まり、拝殿で祭典の準備を行う。全員で仕出し弁当を食べたあと、18 時前に参詣道に並ぶ石灯篭にロウソクを灯す。さらに、本殿前に宝珠を象った台を置き、その上に 50 個の皿を並べる。その皿に油を注ぎ、灯心をさして火を灯す（写真１）。宝珠型の台は２台あり、あわせて 100 の燈明を神前に献燈することが行事名称の由来である（写真２）。この火は祭りの間中絶やさない決まりである。18 時頃、奈良財産区の役員も合流し、お神酒をいただいて簡単な直会を行う。神職はオヒャクトウのヒアゲには関与しない。献燈が行われている間、婦人会や村の人が参拝に訪れ、お神酒と雑魚などが振舞われる。19 時頃に散会となる。

写真１　宝珠型の台におかれた燈明皿に火を灯す様子

なお、奈良地区には伊勢講が４つあり、現在も２月に行事が行われている。日時は決まっておらず、農業会館で４つの伊勢講が同日にそれぞれ集い、行事を行う。

写真２　左右に献じられた宝珠型の燈明台

写真３　神前にロウソクが献じられた様子

３、事例２　佐奈部神社　二百燈祭

茨木市南部に位置する稲葉町に鎮座する佐奈部神社は、水尾・内瀬・真砂の３つの地区の氏神である。年間の行事は、５月 17 日の春祭り、10 月 17 日の秋祭りで、秋祭りには湯立て神楽が奉納され、境内に各地区の幟が立てられる。

祭りは、各地区から１人ずつ選ばれた総代によって準備が行われる。総代の選出方法は各地区によって異なるが、内瀬地区では自治会の役員の中から選出される。３名の総代から、さらに各地区順番に総代の統轄を行う年番が当たる。平成 28 年（2016 年）の年番は水尾、平成 29 年（2017 年）の年番は内瀬である。

佐奈部神社では、立春から 220 日目の次の土日いずれかに二百燈祭を行う。

当日の流れは、まず年番と総代が 18 時 30 分に神社に集合する。年間の祭りの中で、二百燈祭だけは準備をすべて神社側が行う。修祓、献饌、祝詞奏上のあと式神楽が奉納され、宮司と年番が玉串奉天を行う。その後、本殿前に並べられたロウソクに火が灯される（写真３）。ロウソクは、ロウソク台２台にそれぞれ 50 本、合わせて 100 本が灯され、半分ほど燃やされると新しいものと交換し、あわせて 200 本が灯される。拝殿前では参拝者による玉串奉天が行われ、神社からお神酒がふるまわれる。その間年番、総代は参集所前で待機する。８時半頃散会となる。

４、事例３　下穂積春日神社ヒアゲ

春日神社が鎮座する下穂積は茨木市南部に位置し、地区の北西には上穂積、中穂積、下穂積、倍賀の灌漑用水として文政年中（1818 ～ 1830 年）に開発された市域最大の溜め池である松澤池がある。春日神社は下穂積地区の氏神である。

年間の行事は、正月の新年祭、３月 20 日の祈念祭、ヒアゲ、10 月 20 日（現在は 20 日の前の日曜日）の例大祭である。例大祭では、午前中に湯立てがあり、子供神輿が村中を巡行する。

春日神社では、農業の生産団体である実行組合役員が神社の役員も兼ねている。実行組合の組合員は平成 29 年（2017 年）現在 37 名で、うち 10 名が役員である。毎月１日、15 日は老人クラブによって神社の清掃が行われる。

ヒアゲは毎年９月１日に行われ、実行組合の組合員が参加する。19 時過ぎに、下穂積の改良区別館に各家から提灯を持って集合する。提灯は、大工に頼むなどして各家で作るもので、大きさはまちまちであるが縦 30 ㎝、横 25 ㎝ほどで、木製の長方形の枠に半紙を貼ったものである。提灯の各面には、「御神灯」「五穀豊穣」「●●氏（名字を書く）」「九月一日」と書く。「九月一日」は「今月今日」でもよいとされる。提灯は、本来は背丈程の竹に刺し、上部にバランや南天などの縁起のいい枝を刺していたというが（写真４）、現在は竹が入手しにくいことから提灯に取手をつけ、直接手で持つことが主流である。

集まった面々はお神酒をいただいたあと、各自で提灯に火を入れる。実行組合会長、自治会長からの挨拶のあと、19 時 30 分頃に会館を出発し、神社へ向かう。行列の先頭は、縦 70 ㎝、横 50 ㎝、奥行き 30 ㎝程の大型の提灯が進む（写真５）。この提灯には、「御神燈」「五穀豊穣」「九月一日」「下野積実行組合」と書かれており（写真６）、５メートルほどの竹に刺し、上部に南天の枝を飾る。かつては青竹に刺していたので、もっと大きかったという。また、重かったため、青年団が提灯を持っ

写真４　竹に刺された提灯

写真６　大型の提灯

写真５　神社へ向かう行列の様子

たが、青年団が無くなったので消防団が担当するようになり、現在では実行組合役員が持つようになった。神社に到着すると、到着した順に各自が参拝する。参拝後、時計回りに拝殿の周りを３周まわり、お神酒をいただいて解散となる。その間、先頭の大提灯は竹から外され、本殿前に置かれる。以前は一晩おいていたが、現在は防犯上持ち帰る。ヒアゲに参加するのは男性だけに限らず、かつては家族も一緒に行列に参加したという。

５、行事内容の検討

実施時期の近い３つの事例を挙げたが、これらを比較すると、①行事の時期、②神前に火を献じるという点が共通していることが分かる。①の行事の時期は、事例１が８月３１日、事例３が９月１日とほぼ同時期である。事例２は多少時期が異なるが、同じく９月前半に行事を行っている。②の神前に火を献じるという点は、事例１と２は、燈明とロウソクの違いはあるが、神前に決まった数の火を献じる様子が酷似している。事例３は、事例１、２とは異なる行事を行っているが、提灯によってやはり神前に火を献じている点が共通し

ている。では、３つの事例は何を目的として、春祭りでも秋祭りでもない時期に、神前に火を献じる行事を行っているのだろうか。

事例２の佐奈部神社「二百燈祭」は、無事に二百十日と二百二十日が過ぎた御礼と豊作祈願のための行事であると地元で伝承されている。二百十日とは、立春から 210 日目を、二百二十日は同じく 220 日目を指す。両日は稲実の開花時期にあたり、また台風が通過する時期でもあることから厄日とされ、各地で風除けなどの行事が行われる。佐奈部神社では、二百十日と二百二十日それぞれ 100 のロウソク、合わせて 200 のロウソクを神前に献じ、無事二つの厄日を通過したことの御礼と豊作の祈願を行っているものと考えられる。ちなみに二百十日は９月１日前後にあたることが多い。

さらに注目したいのは、９月１日に同じく茨木市南部に位置する倍賀の春日神社で、稲の無事の成長を祈願して八朔祭が行われていたことである。（茨木市史編さん委員会 2005）八朔とは、旧暦８月１日を指し、早生の稲が実り始める時期であることから、実りの前の豊穣祈願が各地で行われる。八朔は新暦では９月１日に行うことが多く、二百十日と時期が近い。どちらの行事も農耕儀礼であり、稲の豊作を祈願する行事であることが共通している。

事例１、事例３は八朔と二百十日、どちらの行事であるかは明確ではないが、事例１は９月１日の前日に行事が行われ、事例２と行事内容が酷似していること、事例３は９月１日に行われ、行事主体が農業生産の団体である実行組合であることから、いずれも稲作の無事と豊穣を祈願する行事であることがわかる。

以上のことから、３つの行事は稲の実りを前に、稲作の無事と豊穣を祈願するために神前に火を献じており、いずれも農耕儀礼の性格が強いことが指摘できる。これらの行事が行われていることはかつて当地が稲作地帯であったことを示しており、都市化が進み、水田が減少する茨木市南部で現在も伝承されていることは貴重であろう。

６、ヒアゲとの関連性

さらに、もう１点注目したいのは、事例１と事例３の行事名称の「ヒアゲ」である。ヒアゲとは、神社から少し離れた場所に氏子が提灯や灯篭を持って集まり、行列を組んで神社に練りこんだ後、神前に持参した提灯や灯篭を献燈する行事である。ヒアゲは茨木市内の北部から南部まで、全域で盛んに行われており、その行事形態の多くは上記の形で実施されるが、事例１のように提灯や灯篭を持参して神社への練り込みを行わないにも関わらず、ヒアゲという名称で呼んでいる事例も一部ある。実施時期は様々で、全体としては夏祭りと秋祭りが多いものの、ほぼ通年に渡っている（茨木市史編さん委員会 2005）。このような行事は、河内地方や、和泉地方などでもみられるが（高谷重夫 1972）、ここまで行事が濃密に分布しているのは茨木市だけであろう。また、このような行事をヒアゲと呼ぶ地域は茨木市内に限られており、他の地域でヒアゲといえば、盆の時期などに実施される、広場に建てられた大松明に松明を投げ上げて点火する、柱松の行事を指すことが多い。このように茨木市では広く実施されているヒアゲであるが、行事形態の変遷や、なぜ茨木市に集中して分布しているのかなど不明な点が多い。

表１はヒアゲ、もしくはヒアゲと呼称していないが、同種であると考えらえる行事を一覧表にしたもの、図１は実施時期を地図に落としたものである。北部は夏祭りに、南部は秋祭りに実施することが多いことが読み取れるが、中でも事例１と３が位置する茨木市南西部では、９月１日前後に行事が行われており、八朔や二百十日に関連し、稲作にまつわる豊作祈願としてヒアゲが行われていることが分かる。火にまつわる行事には、愛宕信仰や盆行事などがあるが、茨木市南西部で行われているヒアゲは、農耕儀礼の性格が強いことが指摘できよう。茨木市のほぼ全域で行われているヒアゲの行事は、その行事形態は各地域で類似しているが、実施時期の違いに伴って祈願内容が異なる可能性があることは、茨木市で特徴的なヒアゲという行事の性格を考えるうえで、注目される。

７、おわりに

本稿では、茨木市南西部において８月後半から九月前半に行われている三つの行事に注目し、事例報告を行った。また、三つの行事が実施される日程と行事の主体組織から、３つの行事が八朔や二百十日、二百二十日に関連した稲作の無事と五

穀豊穣を祈願する行事であることを指摘した。加えて、茨木市に広く分布するヒアゲの中でも茨木南西部のヒアゲは9月1日前後に行われているため、農耕儀礼としての性格が強いことがわかり、実施時期の違いに伴ってヒアゲの祈願内容が異なる可能性があることを指摘した。ヒアゲは茨木市全域で行われており、その他のヒアゲの性格についても今後調査を継続していきたい。

参考文献（五十音順）

茨木市史編さん委員会 2005『新修茨木市史』第十巻別編民俗編　茨木市　p. 494
茨木市史編さん委員会 2005『新修茨木市史』第十巻別編民俗編　茨木市　p. 237
高谷重夫 1972『日本の民俗 大阪』第一法規出版　p. 143

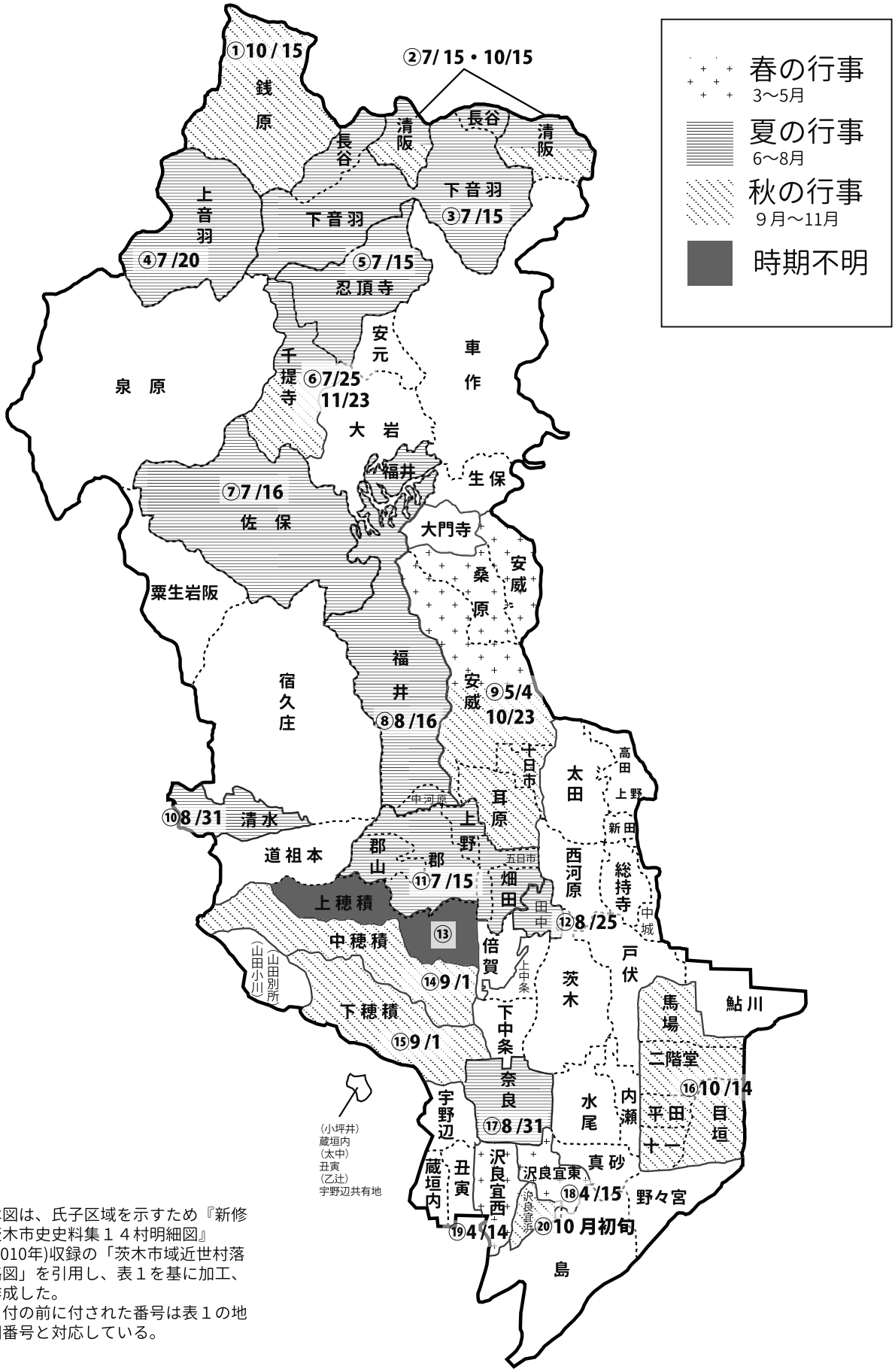
謝辞

末尾になりましたが、調査でお世話になりました下穂積地区の皆様、佐奈部神社宮司宮崎鏞輔氏、佐奈部神社年番久賀久一氏、奈良地区の皆様、そして奈良春日神社のヒアゲおよび佐奈部神社の二百燈祭についてご教授いただきました茨木神社宮司岡市正規氏に心から御礼申し上げます。

表１　茨木市内におけるヒアゲおよび類似行事一覧

地図番号	鎮座地	神社名	日時	行事名	行事概要	参考文献
①	銭原	八幡大神宮	10月15日	秋祭り	現在は境内に提灯を立てるだけになっているが、４０年くらい前まではヒアゲの行事がおこなわれていたという。	a
②	清阪	素戔嗚尊神社	7月15日 10月15日	夏祭り（ヒアゲ） 秋祭り（ヒアゲ）	夏祭りと秋祭りのことをヒアゲという。神前に供え物をし、お神酒をいただく。かつては櫓に提灯をかけたものを飾ったが、現在は行っていない。家から神社に提灯を持って行く行事は行ったことがない。	聞き取り調査
③	下音羽	素戔嗚尊神社	7月15日	夏祭り（ヒアゲ）	各家から１名が提灯を持って御旅所に集まり、歩いて神社まで向かう。現在は15日に近い日曜日に行う。	a
④	上音羽	天満宮	7月20日	夏祭り（ヒアゲ）	各家から上音羽のクラブ（現上音羽自治会館）に提灯を持参して集まる。お神酒を飲み、提灯に火を入れた後、伊勢音頭を歌いながら（現在はテープで流す）クラブの庭を反時計回りに三周する。その後行列を組んで神社へ練り込み、社殿の周りを同じく三周したあと、所定の場所に提灯を立てる。	H29現地調査
⑤	忍頂寺	八所神社	7月15日	夏祭り（ヒアゲ）	各家から提灯を持って八所神社に集まり、提灯に火を入れた後宝池寺に向かう。H28年は修験道の行者が法螺貝を吹いて先導した。宝池寺に着くと、寺の奥にある竜王池の周りを三周し、拝殿前に持参した提灯を立てる。その後行者による護摩焚きが行われる。	H28現地調査
⑥	千提寺	天満宮	7月25日 11月23日	祭り	祭礼にはヒアゲといって宮から御旅所に提灯を灯して巡行した。	a
⑦	佐保	言代神社 高座神社	7月16日	ヒアゲ	昔はヒアゲがあり、太鼓も出していたという。	a
⑧	福井	新屋坐天照御魂神社	8月16日	献灯祭（ヒアゲ）	もとは各家々が提灯に灯をともし、一の鳥居から神社に向かってのぼる行事であった。近隣組織であるカブごとに所有している太鼓をたたいて神社へ上がった。現在は各自治会で保管する提灯を、当日夕方までに境内に建てておく。午後７時頃に提灯に火を入れ、その後神事を行う。神事終了後はマジックショーなどの催しがあり、社務所で直会が行われる。ロウソクの火が消える９時頃に行事が終了する。	a
⑨	安威	阿為神社	5月 4日 10月23日	大祭 ウラマツリ（湯立神事）	各組の若中が、組ごとに各地区に飾っている提灯に火を灯し、その提灯を持って神社に行列を組んで練りこむ。拝殿前の定められた場所に提灯を飾り付け、若中の代表者が神楽の授与を受け、全員でお神酒をいただいた後、提灯の火を消して各組へ帰る。かつては提灯を神社へ持って行くときに熊野節に似たヒアゲ歌を歌っていた。	H29現地調査
⑩	清水	春日神社	8月31日	ヒアゲ	各家から一人ずつ神社に弁当を持って行き、酒を飲んで太鼓をたたいてさわいだ。このときに稲に虫がつかないように豊年を祈る。かわらけに油を入れて火をつけて供え、その火が消える夜の12時くらいまでお宮にいた。	a
⑪	郡	郡神社	7月15日	献灯祭（ヒアゲ）	午前中に、宮司によって献灯祭の祭典が行われ、各地区の宮総代が出席する。夕方、氏子区域の地区ごとに高張提灯や提灯を持って神社に練り込む。境内の所定の位置に提灯を立て、ロウソクの火が消えるまで境内で過ごす。ヒアゲは田植えが終わった御礼と、五穀豊穣を願う行事とされる。かつては15日までに干ばつ等で田植えが終わらなかった場合、ヒアゲを延期した。	H29現地調査
⑫	田中	天満宮	8月25日	火揚祭	若衆が行う。詳細不明。	b
⑬	上穂積	春日神社	不明	ヒアゲ	詳細不明。	a
⑭	中穂積	春日神社	9月 1日	ヒアゲ	八朔にヒアゲを行う。「御神燈」「家内安全」と書いた角提灯に灯を入れて各家から神社に持って行く。	a
⑮	下穂積	春日神社	9月 1日	ヒアゲ	下穂積実行組合員が「御神灯」「五穀豊穣」「●●氏」「九月一日」と書いた角提灯を持って改良区別館に集まり、行列を組んで神社に練り込む。参拝後拝殿を三周して帰宅する。	H29現地調査
⑯	五十鈴町	溝咋神社	10月14日	大祭	各地区から青年会が提灯を持って宮入した。宮元の馬場だけは熊野節を歌って宮入りすることができた。	a
⑰	奈良	春日神社	8月31日	オヒャクトウのヒアゲ	100の小皿に油と灯心を入れたものに火を灯し、神前に供える。	H29現地調査
⑱	沢良宜東	皇大神社	4月15日	ヒアゲ	かつては湯立て神楽を行っていた。青年団がヒアゲといって十二の提灯をつるし、太鼓を出して子どもが叩いたという。	a
⑲	沢良宜西	素戔嗚尊神社	4月14日	ヒアゲ	ヒアゲといって夜、各家から家紋入りの提灯を持ち寄りつりさげた。	a
⑳	沢良宜浜	道祖神社	10月初旬	祭り	ヒアゲといって夕方に各家から提灯に灯をともしてコミヤに参り、藤棚にぶら下げる。	a

【参考文献】
a. 茨木市史編さん委員会 2005『新修茨木市史』第十巻別編民俗編　茨木市
b. 黒田一充編 2007『神社を中心とする村落生活調査報告書（１）大阪府―大阪市・三島郡・豊能郡』なにわ・大阪文化遺産学叢書３ 関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター



※ 本図は、氏子区域を示すため『新修茨木市史史料集１４村明細図』(2010年)収録の「茨木市域近世村落略図」を引用し、表１を基に加工、作成した。
日付の前に付された番号は表１の地図番号と対応している。

図１　茨木市内におけるヒアゲの日程